

旧中山道沿いの古民家活用提案

ー 浦和宿の町並み変遷とともに ー

Keywords

旧中山道 浦和宿 宿場町 短冊形区画
中山道分間延絵図 浦和宿本陣 浦和宿絵図

1. 研究背景・目的

埼玉県さいたま市浦和区は、旧中山道が通っており、人々が行き交う宿場町及び市場として賑わいを見せた。しかし、現在は、その面影が見られない。今回は、浦和区近郊における中山道沿いの町並みの歴史の変遷を明らかにしたうえで、そこに現存する古民家を移築し活用提案をすることを目的とする。

2. 調査方法

- ①中山道に関する歴史的文献、絵図を調べ、浦和区内における中山道沿いの町並み変化に関する情報を調べる。
- ②浦和宿に残る古民家の実測調査を行ない建築の特徴を把握する。
- ③江戸時代から現在までの地図を比定し都市史的観点から、浦和宿から現在の浦和までの変遷を明らかにする。
- ④②、③より実測した古民家の歴史的価値を見だし、適切な場所に移築し活用提案を行なう。

3. 浦和における旧中山道との関わり

中山道は、江戸時代に作られた五街道の1つで江戸と京都を結ぶ重要幹線の役割を担った街道である。中山道が整備される前は、東山道と呼ばれていた。その道中の浦和は日本橋から数えて三番目の宿場で、本陣や問屋がおかれ、宿場町として繁栄した。



図1 中山道の街道全体図

表1 天保14年 中山道宿駅（浦和近郊）の規模

宿名	町並みの長さ	距離換算 (km)
蕨	南北へ10町00間	約1.090
浦和	南北へ10町42間	約1.167
大宮	南北へ9町30間	約1.036

中山道宿村大概帳(1843年)より作成

研究指導：伊藤洋子 教授



AK11098

林 秀樹

4. 浦和の町並み変遷

4.1 中山道分間延絵図による浦和宿周辺の調査

「中山道分間延絵図」は、18世紀末から19世紀初頭にかけて、江戸幕府の道中奉行所で実地の測量や調査を行った上で文化3年(1806年)に完成した「五街道某外分間絵図並見取絵図」の中山道部分だけを再構成した絵図である。



図2 中山道分間延絵図、浦和宿周辺

図3 中山道分間延絵図、浦和宿周辺 解説図

図2の延絵図の浦和宿は、玉蔵院(寺院)と成就院(寺院)との間に、本陣1軒、問屋1軒、脇本陣が3軒、高札が1基存在することが分かる。(図3参照) また、延絵図解説書から、天保14年(1843年)の記録では、宿内の家数273軒(表2参照)、人口1230人、宿内は、江戸方面より、下町・中町・上町に分かれ、中心は中町と下町であること。宿泊施設は、本陣、脇本陣の他に、旅籠屋が15軒あること、本陣は、建坪約200坪、脇本陣のうち1軒が約120坪、残り2軒が約60坪であった。また、天保14年(1843年)浦和宿内における旧中山道の道幅は、2間(3.636m)であることが判明した。しかし、延絵図では、道幅が大変大きく描かれており、絵図として誇張されていると考えられる。

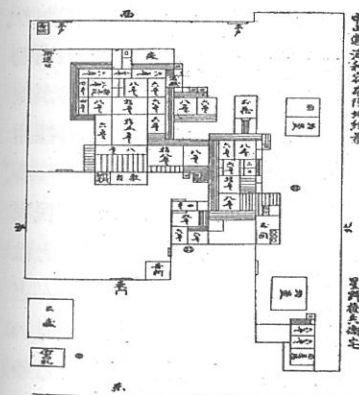
表2 天保14年 中山道宿駅（浦和近郊）の家数

宿名	宿内惣家数(軒)	本陣(軒)	脇本陣(軒)	旅籠屋(軒)
蕨	430	2	1	23
浦和	273	1	3	15
大宮	319	1	9	25

中山道宿村大概帳(1843年)より作成

4.2 浦和宿本陣について

本陣とは、宿場で諸大名などの宿泊所として指定された宿のことで、浦和宿では、星野鏈兵衛が勤め、建坪約200坪で門構・玄関付きの大規模なものであった。明治時代には、明治天皇が大宮氷川神社へ行幸される際に、行在所として利用された。個人の邸宅であったため、建物は取り壊され、現在は、表門のみが緑区大間木に移築されている。なお大熊氏の中山道浦和宿本陣(1834年)に関する論文より、本陣の地絵図(明治初期)が掲載されており、かなりの規模の邸宅だということが分かる。(図4参照) 本陣の基本平面形式は、表門と武台玄関を有する主要部である座敷構、荷物置場である大板間を中心としていくつかの間を有する街道に面した表構、本陣家族の居住部分で表構と連なる勝手構の3部構成になっている。



大熊喜邦氏所蔵(明治初期)

図4 中山道浦和宿本陣地絵図(注1)

4.3 浦和宿絵図による浦和宿周辺の調査

「浦和宿絵図」は、文化8年(1811年)4月に宿役人、総百姓立会いの上、検地帳と引き合いで一筆ごとに確認し作成したものである。中山道を中心に宿全体が描かれ、玉蔵院、浦和宿本陣、成就院、御林(御殿跡)、岸村分の調神社などが図入りで表されている。



図5 浦和宿絵図

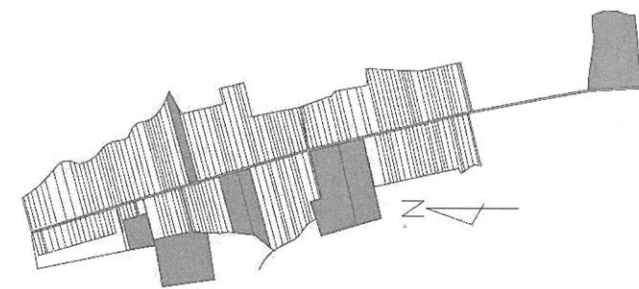


図6 浦和宿絵図、民家敷地図

図5の浦和宿絵図は、旧中山道沿いに間口が小さく奥行が長い短冊形の土地を利用した民家が並んでいたことが分かる。宿絵図の解析により短冊形の土地利用に際しては、手前に家屋、奥に畑に使用されていた。また当時、民家は、旧中山道沿いにしか形成されておらず、他は、田畑、藪などが広がっていたことが分かった。浦和宿の敷地間口は3間から10間が約8割を占めているが、間口は様々で、敷地割は一定してないがこれに対して、大宮宿の町並みの間口は7間から8間が全体の4分の3を占めており、一定した間口の取り方をしていた。この差は、浦和宿が中世から市場などで自然発生的に形成したのに対して、大宮宿は近世に入り幕府によって新たに造られたものかにある。

4.4 明治13年浦和地図(埼玉県立文書館所蔵)による分析

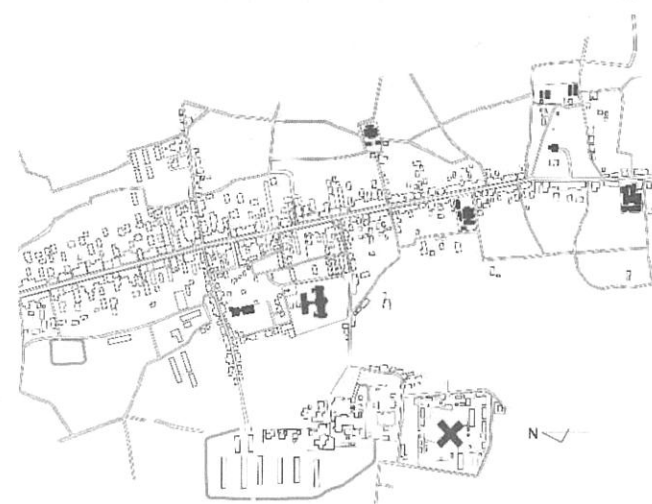


図7 明治13年 浦和宿周辺

明治に入ると、旧中山道に直交する道が作られ、そこに町並みが形成されている。また埼玉県庁、埼玉県監獄所、師範学校など公共施設が建てられており徐々に都市機能が配置されていったことが分かる。民家も道沿いだけでなく、中程にも徐々に形成されている。しかし田畑も多く残っている。

Hideki HAYASHI

4.5 大正3年浦和地図（国立国会図書館所蔵）による分析



図8 大正3年 浦和宿周辺

大正に入ると、鉄道ができ、駅から県庁に通ずる道も形成され浦和駅周辺に町並みが形成されていった。江戸、明治時代と比較すると、道沿いだけでなく土地の区画全体に民家が建てられている。

4.6 昭和から現在にかけての浦和



図9 平成19年 浦和宿周辺

昭和11年浦和市全図（岐阜県図書館所蔵）及び2007年ゼンリン住宅地図（埼玉県立文書館所蔵）によると、昭和から現在にかけて全体に町並みは発展し、自動車の普及もあり、県庁付近に新たな主要道路が形成された。現在は町並みもビルが建ち並び、古民家はほとんど見られない。しかし敷地割については、江戸時代の短冊状の名残を残しており、特に旧中山道沿いには、その土地を徐地、もしくは、合地して建てられた建物が多くみられる。

5. 町家調査について

(1) S家実測調査

調査日 2014年 6月25日(水)

対象地 埼玉県さいたま市浦和区常盤2丁目

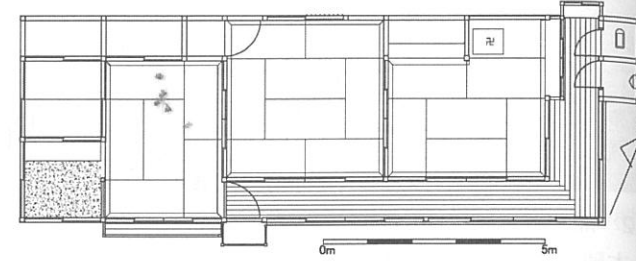


図10 S家平面図

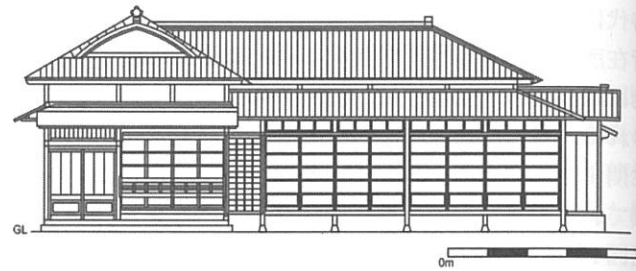


図11 S家南側立面図

(2) S家について

S家は現在、旧中山道沿いにある民家で、昭和15年に建てられたものである。平面図の基本構成は、土間を玄関として、6畳間、8畳間、8畳間の和室が連続しており、8畳間2部屋に廊下が付属している。また、増築前の南側立面図(図11参照)においては、玄関部にむくり屋根が採用されている。このむくり屋根は、寺院の屋根にも採用されており近代和風建築物の特徴の一つといえる。一番、重要なのは、S家が短冊状の細い土地に建てられた民家であるということである。建築年代は、決して古いとは言えないが、短冊状に敷地を利用した古民家もほとんど現存していないため、S家は、十分に歴史的価値を見いだせると考える。しかしS家は、今後、取り壊される予定であるため、適切な場所に移築し、活用し後世に残していくべきである。

6. S家の移築活用提案

6.1 S家の利活用に関する聞き取り調査

S家を移築し利活用するにあたって、どのような機能が望ましいのかを浦和区役所都市公園課の方にお話を伺った所、浦和区民の誰もが利用できる用途機能及び、近年、浦和で、待機児童の問題があるため、その対処に有効な用途機能が望ましいとの回答を得た。そこでS家の利活用にあたって、これらの望まれる機能を盛り込む。

6.2 S家の移築先の検討

S家の移築先として玉蔵院の隣の中央公園を選定した。選定理由として、浦和区が玉蔵院から借り受けている土地であり他の土地より移築しやすい点と、玉蔵院が文化財ということもあり周辺の景観が整備されているからである。

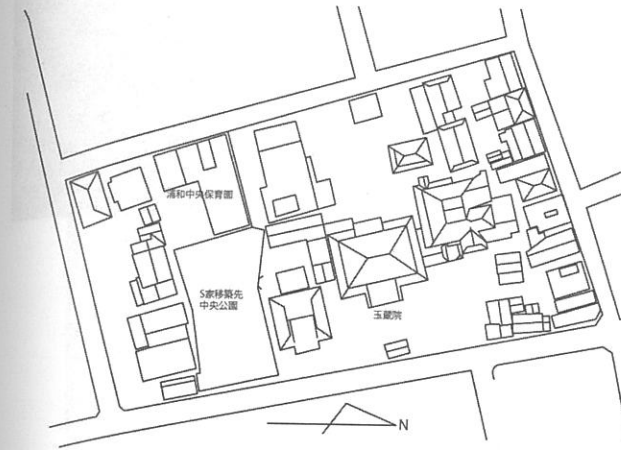


図12 S家移築場所 周辺配置図

6.3 活用提案

移築先の中央公園の隣は保育所、玉蔵院がある。また中央公園は災害時の避難場所となっている。これを活かして以下の活用を提案する。

・通常時

普段は、文化教養を身につけられるような児童館として利用する。最近の児童たちは、昔の住宅に触れる機会がない。そこで、S家を利用することで、昔の和式便所などを使ったり、和室で、高齢者を招いて昔の玩具を工作し遊ぶなどの交流の場、お花見、お月見、餅つきなどの季節のイベントに利用し、昔の住宅を知ってもらおう。

・災害時

災害時は、一時的に非難し滞在できる避難地として利用する。しかし避難地として利用するためには、物資倉庫など必要な用途が足りない。そこで、増築し、そこに補うこととする。また、玉蔵院とも連携がとりやすい配置を計画する。

6.4 プログラム

- ・敷地面積 約730.9㎡
- ・用途地域 商業地域
- ・容積率 400%
- ・建ぺい率 80%
- ・高さ制限 なし

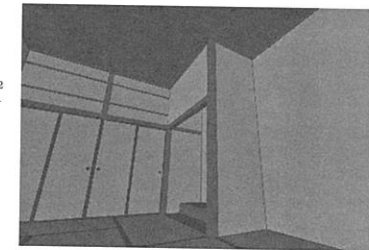


図13 S家活用提案既存部内観パース

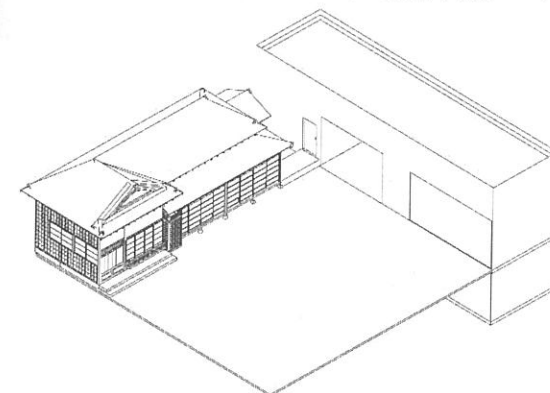


図14 S家活用提案 外観パース

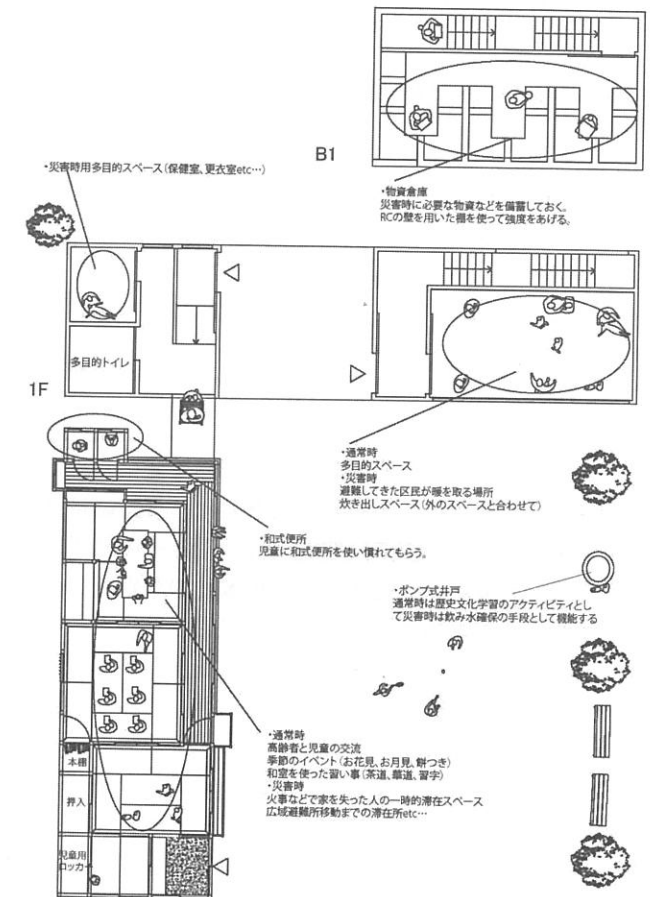


図15 S家活用提案 平面図

7. 総括

今回の調査で、江戸時代は、旧中山道沿いに短冊状の細長い敷地が形成されそこに古民家が建ち並んでいるだけだったが、時代が進むにつれて、旧中山道に直交する道ができ、県庁などの都市機能を持つ建築物が建てられていき、町並みが広がっていった。この著しい都市発達により、短冊状の細長い土地に建つ古民家は消えていき、ビル街となっていた。今回調査したS家が、浦和の歴史を思い起こさせる建築物として浦和区民に活用されることを期待する。

参考文献

- 1) 児玉 幸多 監修 『中山道分間延絵図』 第一巻 昭和51年
- 2) 浦和市立郷土博物館 『特別展中山道浦和宿』 平成11年
- 3) 埼玉県文化財保護協会 『埼玉の文化財』 第43号 平成14年
- 4) 大熊 喜邦 『中山道浦和宿の本陣に関する論文』 昭和13年
- 5) 浦和市史『近世史料編Ⅲ』 中山道宿村大概引用部 昭和59年
- 6) さいたま市立博物館 『第36回特別展 絵図の世界』 平成24年
- 7) 旧中山道地図 <http://gpscycling.net/tokaido/nakasendo.html>
- 8) 中仙道 <http://nakasendo.net/>

(注1) 参考文献4) から転載